

## 国民総幸福量（GNH） 世界一の国へーブータン

写真・文 福島県立橋高等学校 松浦 健人



2015年1月4～6日、「幸福度世界一」と称されるブータンを訪ねた。ブータンでは、外国人に自由旅行は認められておらず、国内移動中は専属ドライバーとガイドと必ず行動をともにしなければならない。唯一の国際空港・パロ空港は世界で最も離着陸が難しい空港の一つといわれている。山々に囲まれていて空港管制がなく、有視界飛行のみ。実際、着陸寸前には迫り来る山肌に恐怖感すら覚えた（写真①）。

空港を出るとガイドとドライバーが待っていた。ガイドはひじょうに若く20歳そこそこだという。家族を養うため、そして国王のために働いていると胸を張って熱弁する横顔がりりしい。

空港近くの青空市場に立ち寄った後、次に首都・ティンプーをめざした。空港に着陸する前にぬよう泳いだ谷の底を、今度は車で移動するのである。昼前にはティンプーに到着した。まるで一昔前の日本にタイムスリップしたかのような町並みに、私は興奮を覚えた。その後、タシチョ・ゾン（国王執務宮殿、写真②）やティンプーを見下ろす丘の上にある大仏、有名な寺院などを観光して初日を終えた。

2011年11月、ブータン国王夫妻が福島に来県されて震災からの復興に対して祈りをささげられたことは日本で大きく報道された。そのことを記した新聞記事のコピーをガイドに渡すと、なんと彼も福島に行ったことがあると告げた。彼の話によれば、2014年3月11～12日、安倍首相から招待されて、彼を含むブータンの青年23人が国を代表して日本を訪問したのだそう。その中で、福島県相馬市でさまざまな活動をしたのだという。このことはブータンでは大きく取り上げられたが、私はその一連のできごとをここで初めて知った。忸怩たる思いにかられた。

翌日は、断崖絶壁の中腹にへばりつくようにある信仰の聖地・

タクツェン僧院（写真③）を訪問した。標高2500mの登山口から一本道を登り、標高約3000mのタクツェン僧院までは往復4時間程度だろうか。道中、ガイドは私への励ましのために、日本で覚えたという歌を歌ってくれた。壮大な景色にやさされながら、2時間後、ついにタクツェン僧院（写真④）に到着した。

ブータンで一番の信仰の場である。世界の他の場所では見ることのできない祈りの雰囲気がそこにはあった。もちろん、ここからの景色も絶景である。神聖さのために、このような場所に建造物をつくることへの苦勞がしのばれた。

ブータンには日本に好意的なイメージをもっている人が多い。それはひとえに「ダシヨウ西岡」こと西岡京治氏の功績によるものである。1960年代まで、ブータンでは農業はほとんど成功しなかった。そこで、西岡氏は夫婦で移住して農業指導にあたり、稲作をはじめ多くの農作物の作付けに成功し、ブータンの自給率を劇的に向上させたのである。このような経緯のため、田んぼの雰囲気も日本に似ている（写真⑤）。92年に彼が亡くなった際には国葬が行われた。ブータンで彼を知らない人はいないといわれる。

2日目の夕方、ホテルの近くで、子供たちが国技であるブータン・アーチェリーに興じていた（写真⑥）。しかし、一般的にブータン人はシャイで外国人に対してよそよそしい。おもむろに近づき、声をかけてみる。とまどう彼らに、まずは私が弓道をやっている動画を見せ、アーチェリーをやらせてくれと懇願した（ブータンでは英会話教育がほどこされており、子供でも英語を話すことができる）。そこからアーチェリーを通じて子供たちと心の交流が始まり、時間が過ぎるのも忘れて濃密で貴重な時間を共有できた（写真⑦）。旅を彩るのはやはり、現地の人々とのふとした交流であると実感した、「幸福度世界一の国」であった。

●より詳しいレポートは、『地理・地図資料』web号に掲載します。